

本当の「めでたさ」とは

中央仏教学院長 北 島 晃 融



教育生のみなさんには、慈光のもと新しい年を迎えられましたこと有り難いことと思います。昨年9月にはじまった新年度も早4ヶ月が過ぎ、順調に学習がすすんでいることと思いますが、やはり正月は今一度静かに立ちどまって、ものごとをあらためてもう一度見つめ直すことも必要ではないでしょうか。

さて「あけましておめでとう」の挨拶は、正月に何度も口にしている言葉でしょう。事実私も今まで何万回口にしたかわかりません。ここで静かに立ちどまって「めでたい」の言葉をふりかえてみましょう。

広辞苑には、①好み愛したい感じ ②うるわしい ③祝う・慶賀すべき ④「お」を付けて、人がよすぎて他人に欺かれやすい ⑤慣用句として「死ぬ」「倒れる」と説明されています。①は古い用法で「めでまどう」から「愛するゆえに迷う」ということで、愛するという意味が時代とともに変化し、「めでたき祝のうちに涙を流し」のように、正月・結婚式などで慶賀すべき・良いことなどの意味に変化したようです。確かにお念仏を喜んだ小林一茶の句「めでたさも中くらいなりおらが春」などは、まさしく慶賀という意味で使われています。

しかし一方では、言葉の推移のなかで、④のように反語的な意味や⑤のような忌み言葉として使われるとも書かれています。このように「めでたい」の言葉には「めでたくない」という意味も含まれていることを考えますと、はたして本当のめでたさとはと考えさせられます。

私事ですが今年で60才、世間でいう還暦の歳です。人生50年といわれたことから考えますと、長生きで「めでたい」ことなのでしょう。確かにまればなる人身を受けて、生きがたい人生を60年も保たせてもらえたことは「めでたい」といえるでしょう。しかし最近よく味わっている言葉に「50にして49年の非を知る」(伯玉)があります。50才になってやっと今までの人生の間違いに気づき反省している言葉です。考えてみれば長生きするほど、辛く苦しく悲しいことも多く、「めでたくない」ことが沢山あるのではない

でしょうか。何年か前にあるスポーツ選手を取材した番組で、「スポーツをやりはじめてからの私の人生、自分との戦い、他の選手をけおとし、まさに九割九分以上苦しみとの戦いでした」との言葉が印象的でした。この言葉を考えますと、私たち人間社会のなかで使われる「めでたい」とは、あくまでも相対的「めでたさ」でしかないということです。

それでは、親鸞聖人は「めでたい」をどのように教示してくださっているのでしょうか。聖人80才のときのご消息に、

明法御房の往生の本意とげておはしまし候ふこそ…これにこそぞしおはしますひとびとの御ために、めでたきことにて候へ

(『註釈版聖典』742頁)

ひらつかの入道殿の御往生のこときき候ふこそ…めでたき申しつくすべくとも候はず

(同738頁)

とお示しくださっているように、私たちの今生での悲しい別れである死も、阿弥陀如来の絶対の世界・浄土に往生させていただき、言い換えれば「めでたき申しつくしがたき」世界に転ぜられていくこと、つまりお念仏を喜ぶ人にこそ、絶対的「めでたき」が開かれると教示されています。

蓮如上人は、聖人ご教示のお心を次のように教えてください。

勸修寺村の道徳、明応二年正月一日に御前へまゐりたるに、蓮如上人仰せられ候ふ。道徳はいくつになるぞ。道徳念仏申さるべし。

(同1231頁)

道徳の「おめでとうございます」の挨拶に対し、蓮如上人は「おめでとう」とは申されずに、「年齢を尋ねられた」ということを味わわせていただきますと、本当の「めでたき」の意味もわからず、いたずらに59年をすごしてきた私への厳しい問いかけであり、今後は念仏申す人生であれよとすすめてくださっていることでもあります。すなわち、私たちの今生での悲しい姿を案じてくださっている阿弥陀如来におまかせし、自分にできることを日々精一杯やらせてもらえる人生を恵まれるところに、本当の「めでたき」があると示されているのです。

様々な不安と苦悩を抱えて歩まねばならないのが、私たちの人生です。しかし、その人生を本当に「めでたい」人生として歩ませてもらえる道とは、お念仏をいただくところにあります。新年にあたり、今一度立ちどまり、あらためて如来のご本願を聞かせていただく人生をスタートいたしましょう。

(仏教担当)